

関一得『呂祖師三尼醫世説述』の形成

——湖州周辺の呂祖扶乩信仰を利用した「龍門正宗」正統化——

森 由利亜

一、はじめに

十八世紀末から十九世紀初頭にかけて、浙江省湖州金蓋山を中心に全真教の龍門派門徒として活動した関一得（一七五八―一八三六）は叢書『古書隱樓藏書』を編纂した。『呂祖師三尼醫世説述』（以下、『説述』と略称）は、その中に収められた一篇である。本稿は、『説述』の成書について考察し、合わせて関一得の宗教におけるその意義について、以前拙論「呂洞賓と全真教」（森・一九九九）において述べた所を補足しつつ論ずることを目的とする。

筆者はかつて上掲の拙論（森・一九九九）において、関一得が「道」に自らを接続し「道」の正統性を調達する際に用いる手段として、少なくとも二種類の相互に補完的な方法を採用していることを指摘した。本節では、本論に入る前段階として、その時の論を踏まえて、二つの正統性調達の方法について手短にまとめておく。二

種の正統性調達の方法のうち、そのひとつは、丘処機から王常月に至る伝戒の系譜を奉じること（¹）で正統性を得る方法である。モニカ・エスポジト氏（Monica Esposito）は、関一得が構想したこの伝戒の系譜が、関自身によって「龍門正宗」として観念されていることを指摘した。²以下では、エスポジト氏の議論に依拠して、この正統性調達のための系譜を「龍門正宗」と呼ぶ。もうひとつが、呂祖の扶乩を介してその教えの根本に結びつく（具体的には、扶乩によって教えの内容を自らの修行環境へと直接開示する）こと（³）で正統性を得る方法であり、それは「三尼医世之道」と呼ばれる。

三尼とは、老子・孔子・釈迦をそれぞれ青尼・仲尼・牟尼と呼称した上でそれらを総称する名称である。三尼は林兆恩（一五一七―一五九八）が言及している呼称でもあるため、その起源は金蓋山の外に求められるべきであることが知られるが、その淵源や金蓋山への伝播については未詳である。³「三尼医世之道」の想定によれば、その道は伏羲・黄帝から三尼へと伝えられたという。その三尼を補

佐するのが、文尼と呼ばれる呂祖である。「三尼医世の道」においては、呂祖が扶乩を通じて乩壇に下り、三尼の道を説くのである。三尼の伝統を設けることで、関一得とその扶乩信仰の同志たちは、呂祖を通じて三教の正統的な教えを直接享受する立場に自らを置くことになる。

「三尼医世の道」を説く經典としては、『説述』のほかに関一得撰『三尼醫世説述管窺』（『管窺』と略稱）・沈一炳説『三尼醫世説述功訣』（『功訣』と略稱）がある。これらはともに関一得とその弟子によって編まれた十四冊からなる叢書『古書隱樓藏書』の第五冊に収められている。⁽⁴⁾以下では、『説述』についてその成書を中心に検討する。

二、『呂祖師三尼醫世説述』現行本の構成

関一得が『古書隱樓藏書』に該書を収めて刊行する以前より、『説述』には異本がいくつが存在していたらしいことが、関の記載によつて了解される。しかし、『古書隱樓藏書』本以外の本は管見の限り見出されていない。したがって、現状では関一得の記述にのみ基づいて、その諸本のありようについて可能な限りの整理をするしか方途が残されていないのである。

『古書隱樓藏書』所収の『説述』は、関一得による道光戊子（一八二八）の序（一葉表～五葉表）、陶太定（？～一六九二）⁽⁵⁾が康熙

甲辰（一六六四）年に金蓋山の龍嶠山房で敍べたという原序（六葉表～七葉裏）、「三才一氣之圖」とその解説（八葉表～裏）、および本篇（九葉表～二十三葉裏）によって構成される。また、同書には関一得による道光戊子（一八二八）年の跋（三十五葉表～三十六葉表）がある。⁽⁶⁾更にその本篇は、全體が第一步から第六歩に到る六段で構成され、各段すなわち各歩は呂祖の乩示である極めて短い本文と、それに付された関一得の疏から成る。なお、陶太定の原序によれば、『説述』は、天上に祕されている三尼醫世の「本經」について呂祖がその義を闡述した注疏であるとされており、經ではないという。⁽⁷⁾関一得の注釈が「疏」と称されるのも、『説述』の本文がすでに注であるために、注の注として疏と称されるのであろう。

三、関一得が見た『呂祖師三尼醫世説述』の諸本

関一得は複数の『説述』の諸本を参照して彼のテキストを構成したようであり、諸本を入手した経緯についてもその序や疏のなかで説いている。先述の通り、筆者は『古書隱樓藏書』所収の現行本のほかに現存する『説述』のテキストを知らないが、関一得は自分が幾つかの異本や異本の存在に関する情報を入手した経緯について断片的に語っている。そのような記述から、関一得が存在を確認した諸本、入手して内容を見ることを得た諸本、さらにそれらと現行本との関係についてある程度知ることができる。

まず、関一得が言及している諸本を掲げる。なお、各本の呼称は筆者が便宜的に付したものである。

① 簀中書本——王陽明の「簀中書」なる書の内編で、王龍溪が刊行したとされるもの（二葉表）。関疏に引かれて本文の校勘に用いられているので、関一得はこれを入手しているはずである。ただし入手の経緯などは不明。

② 朱珪蔵劉基跋本——関一得は、乾隆五十四（一七八九）年に、浙西督学として湖州に滞在した朱珪（一七三一—一八〇七）と面会し、朱が『説述』を珍藏していることを知った。関一得は、面会時にこの本に誠意伯すなわち劉基（一二三一—一三七五）の跋があるのを実見しているが、朱珪が多忙であつたためこれを借りて抄録することはできなかった（一葉裏）。

③ 黄守中本——沈一炳の辞世から四年後、すなわち、乾隆五十五（一七九〇）年頃、関一得が雲南鶏足山で黄守中と面会した際、黄守中が『説述』を所有していることを知るが、抄録することは許されなかった（二葉表—四葉表）。

④ 朱珪蔵無名人手跋本——関一得はその後乾隆五十八（一七九三）年、洞庭東山（江蘇省）に遊び、朱氏邸で二冊の写本を実見する。そのうちのひとつが朱珪が所蔵していたという本である。ただし、跋は無名の人によるものとされており、②の劉基跋本とは異なるようである（四葉表）。であるとすれば、朱珪

は二本を有していたことになる。入手したかどうかは不明。

⑤ 陶太定手録本——④と同じく、関一得が洞庭東山の朱邸で実見した書。陶太定（？—一六九二、石庵はその號）が金蓋山龍嶠山房で手録して序（『古書隱樓藏書』本の「原序」）を付した本で、黄赤陽（黄隱真）によって輯題されたものという（四葉表）。後述の通り、関一得はこれを入手していると見てよい。

①から⑤のうち、関一得が実際に入手したと思われるものは、①簀中書本と⑤陶太定本の二種である。『説述』の本篇では、本文が示された直後の関疏ではしばしば「簀中書」と「陶律師本」もしくは「陶本」との対校が行われる。例えば、『説述』十一紙には「大壮卦」について二つの本文、すなわち「繼於腦中、向頂注之」（十一葉表）および「此爲下手第一步」（十一葉裏）の文字を載せるが、これらの本文の文字に付された関疏の冒頭には、それぞれ「簀中書の文字は同じ、陶本では「中」字は「際」字に作り、下の句には「門上」の二文字がある。「注之」は「一注」に作る（簀中書同、陶本中作際、下句有門上兩字。注之作一注）」（十一葉表）および「簀中書の文字は同じ、陶本ではそれぞれの歩をあらわすこの句に「功法」の二文字がある（簀中書同、陶本每歩此句有功法二字）」（十一葉裏）との記述がある。こうした記述から、関一得が簀中書本と陶太定本を入手していたことは疑いない。

次に、関一得が所有していたと考えられる簀中書本および陶太定

手録本の二本について、関一得が言及している箇所を確認しつつその特色を検討してゆこう。

(三―二) 陶太定本について

(三―一―一) 関一得による陶太定本の入手

まず上掲⑤陶太定本について見てゆく。関一得が校訂に用いている「陶律師本」すなわち「陶本」に相当するのは、おそらくこの本であろうと推測される。以下、この本を「陶太定本」と称する。これを入手した時の模様は次に引く関序の一部に記されている。なお、引用部分には陶太定本の入手先と同じ場所（東山朱氏の居所）で関一得が閲覧した④朱珪藏無名人手跋本についての言及も含まれる。

癸丑の年、「私は」洞庭東山で、朱氏〔邸〕に休憩した。朱氏はわが〔金蓋〕山の先輩である九還翁の孫で、玄學〔すなわち道教〕を好んでいる。〔その時、朱氏は〕二冊の藏書を出して〔私に〕示した。ひとつは朱文正〔文正は朱珪の諡〕の堂に珍藏していた本で、手鈔本で無名子の手書きの跋が付されている。もうひとつは、わが〔金蓋〕山の〔陶〕石庵師〔すなわち陶太定〕が龍嶠山房にて手書きで記録し、黄隱真〔すなわち黄赤陽〕によって編集され題された本で、その文の意味はひときわ明確である。鷄足真人〔すなわち黄守中〕が詳細な善本と賞賛していたもの〔がこの本〕であろう。そこで、「私は朱氏にこれら

の本を」持ち歸りたいと頼ん（で持ち歸ったの）だが、その時にはその中に述べられた靈妙な道理について聞いておらず、愚かにも道が成った後に〔醫世の法を〕行おうなどと考えて〔靈妙な道理を悟らないまま過ごして〕いた。

至歲癸丑、游洞庭之東山、休於朱氏。朱爲吾山前輩九還翁孫、好玄學。出示藏本二冊、其一爲文正中堂珍藏之書、亦屬謄本、而無名人手跋。其一爲吾山石庵律師手錄於龍嶠山房、輯題於隱真黃祖者、文義更爲明暢、殆雞足眞人所稱詳善本也。因乞携歸、其時未聞箇中玄理、妄期道成而後行之。（四葉表）

これによると、癸丑の年、すなわち乾隆五十八（一七九三）年、洞庭東山の朱氏の藏書として④朱珪藏無名人手跋本と⑤陶太定本とがあるのを関一得は目撃したのだという。そのうち、陶太定本はもと金蓋山龍嶠山房にあった手抄本とされ、黄隱真すなわち黄赤陽が題を付した本とされる。関一得は東山の朱氏のもとからこの本を金蓋山に「携歸」することを得たようであり、入手することに成功したものと見られる。⁽⁸⁾

(三―一―二) 黄隱真撰題と現行本題記の誤記について

ここで一点細かい事を述べなくてはならない。上の引用にもあるように、陶太定本は「輯題於隱真黃祖者」とされ、陶太定の同時代人である黄赤陽によって題を定められたものとされている。⁽⁹⁾ところが、

『古書隠樓藏書』所載の『説述』の冒頭の題記では次のように記されている。

龍門第八代戒子黄守中題 第十一代関一得謹疏
龍門第九代戒子陶太定輯 第十二代沈陽一恭校 (九葉表)

この記載によると、『説述』に「題」したのは黄赤陽（隠真、守元）ではなく、黄守中とされている。黄守中とは、黄守中本（先の③として掲げた本）の所有者で、雲南鷄足山にいる鷄足真人黄守中のことであろう。果たして、『説述』に題を付したのは、黄赤陽と黄守中のいずれであろうか。結論を述べるなら、上の題記に示される第八代戒子の法名「守中」は、『金蓋心燈』「黄赤陽律師伝」において黄赤陽（黄隠真一五九五～一六七三）が王常月から得たとされる所の法名である「守元」（卷二・二十五葉表）の誤記だと考えられる¹⁰。『説述』には、関一得が鷄足山で黄守中の『説述』を目撃しながらも借りられなかった話が載せられるが（二葉表）、そこでも黄守中が『説述』のために題を記したという記載はない。その題が黄赤陽によって記された事は、上の「関序」に「輯題於隠真黄祖者」と述べられていたことその他、関疏の一節に次のようにあることによって裏付けられる。

この書の前序は陶石庵〔太定〕律師によって著され、その標題

はやはり黄隠真律師によって付された。〔その題に〕「呂祖師三尼醫世説述」とされているのは、この書にはほかに三聖の本經が存在して、呂祖は〔『説述』においては〕その〔本經の〕意味する所を述べて人に教えているということを明らかにしているのである。

是書原序爲陶律師石庵著、其標題蓋出自隠真律師。曰呂祖師三尼醫世説述者、正以明是書尚有三聖本經、呂祖述其意以教人云爾。（十葉表）

文中で「其標題蓋出自隠真律師」と記すように、ここでは陶太定本の標題は隠真律師、すなわち黄赤陽の手になるものとされるのである。また、その題が「呂祖師三尼醫世説述」であることも明言されている。

このように、関一得による記事の中で二箇所にわたり、陶太定本の題目が黄赤陽によって示されたことを述べている。筆者が、上引『説述』巻頭に「龍門第八代戒子黄守中題」とあり、現行本の「題」が黄守「中」とされているのは実は誤りで、そこには本来黄赤陽の法名が入っていたはずだと考える理由はここにある。黄赤陽は、龍門派弟子としての法名を二つ有しているが、おそらくここには王常月から授けられたとされる法名「守元」がもととも書き入れられていたものと推測される。

なぜこのような誤記が発生するのであろうか。関一得本人は黄守

中や黄赤陽については、龍門派系譜繼承の観点から念入りにその位置づけを意識していると思われ、このような誤記を行うことはやや不自然に思われる。筆者が推測するに、この誤写は上で引用した題記に「第十二代沈陽一恭校」として示される、関一得の弟子と思しき人物、沈陽一の校正下で起こっているように思われる。

(三——三) 陶太定「原序」の内容

次に、陶太定の「原序」を見てみたい。現行本に載せられる陶太定の「原序」は、陶太定が康熙三（甲辰、一六六四）年に金蓋山麓の龍嶠山房で著した文で、陶太定本に付され、現行本に継承されたものと思われる。上で引用した閑疏でもこの「原序」に言及している。「原序」には、『説述』の神話的な起源に関する説明も載せられており、陶太定本についてのみならず『説述』全体について知る上で参考になる記述が多い。以下、その内容を検討する。

医世の説は、その本経である「本書の」全文は、金簡「に書かれて」玉函に入れられて、天上の蔵におさめられており、世の人々はこの書のすべてを見ることはできない。

醫世之説、其本經全書、自有金簡玉函、藏在天府、世不概見。（七葉表）

これによると、『説述』の本文は天書であり天に保存されている。

なぜその全体を見ることができないかについて、以下のように説かれる。

この書の全体は、「この道家の医世説述のほかに、」まだ儒家と釋家の医世説述もある。「しかし」太律師である王崑陽祖師は、異人から次のように聞いた。「儒（の経書）は秦代に焚毀され、釋（の経書）は晋代に焚毀され、代々見ることができなくなった。世に伝えられているのは、ただ道宗における医世の入門の法（を説いた書）のみである。」やはり、呂祖が世にとどまっておられた時代に、この説を聞くことがきたので、その本経の教義を明かし述べて、法嗣に授けたのである。つまり、「呂祖の述べた本書は」本経の注疏であつて、经文そのものではない。それ故、その文は平明卑近でわかりやすく、「本」経「所説」の奥深く微妙な工夫や火候については、言及しておらず、ただ道宗における医世の入門の次第を書き記しただけなのである。此書全部、尚有儒釋醫世説述。太律師崑陽王祖聞諸異人云、儒燬於秦、釋燬於晉、世不可得而見矣。世所流傳者、特道宗醫世入手之則。蓋呂祖駐世時、得聞是説、闡述本經之義、授之法嗣。乃本經註疏、不是經文。故其文平近易曉、而於經中玄微功候、尚未述及。第就道宗醫世入手次第叙起焉耳。（七葉表）

元来は、三尼に対応して儒仏道三教の「医世説述」が存在したが、

儒仏の書は早く焼失し、道家の「医世説述」のみ残り、呂祖がその疏を著して後世に伝えたという。疏の内容は入門的なもので、天上にある經の本文とは異なるとされる。呂祖が駐世していた時とはいつであらうか。関一得編『金蓋心燈』冒頭所載「道統源流圖」には純陽帝君すなわち呂祖について、「姓呂、名巖、字洞賓、號純陽子、唐朝進士」（道統源流圖…一葉表）と注しており、関一得が呂祖を唐代の人と見ていることが知られる。つまり道家の『三尼醫世説述』は唐代に著作されたものである。なお、ここでは王常月（崑陽）が『三尼醫世説述』について発言しているかのように記されているが、『説述』が王常月と結びつけられることについては後述する。原序の最後は次のように結ばれる。

この書は本山（金蓋山を指す——森注）に代々藏されてきた本があつたが、何者かに持ち去られてしまった。（その後、）呂祖が「乩」壇に降臨して、述べ示した言葉は非常に詳細である。ここに謹んでそれを記録し、その冒頭に数言述べた。

讀是書者、慎毋褻視焉。是書本山世有藏本、不知誰氏攜去。蒙呂祖降壇、宣示辭意尤詳。爰敬錄之、并數言於首。（七葉裏）

これによると、呂祖の著した三尼の教説の注釈本は、金蓋山に代々所藏されていたが、何者かによつて持ち去られたという。その後、呂祖が壇に降り、おそらく乩筆によつて詳細な内容を伝えたため、

陶太定はそれを記録して陶太定本を成立させたようである。この序が著されたのは、金蓋山の麓にある龍嶠山房とされる。原序の末尾には、「時康熙甲辰元旦旦日、嗣龍門正宗第九代陶太定謹敘於金蓋之龍嶠山房」とある。康熙甲辰は康熙三（一六六四）年である。先に見た「関序」では、陶太定本について、「其一爲吾山石庵律師手録于龍嶠山房」と述べており、陶石庵は「原序」だけでなく、『説述』の全体を龍嶠山房で手録したとされている。これは、何者かが金蓋山所藏の『説述』を持ち去つた後に、陶太定が呂祖の降壇によつてその内容を補つたことを表現しているものと考えられる。その際、恐らく元々金蓋山の外で流布していた『説述』が参照されたのであろう。ただし、ここで氣をつけなくてはいけない点がひとつ残されている。先に見た通り、関一得は陶太定本を、金蓋山上や麓の龍嶠山房においてではなく、洞庭の東山にある朱氏邸で見出して入手したのである。もし陶太定本が金蓋山に保管されていれば、関一得は間違ひなくそれを底本として採用するであらう。なぜ彼は他所で陶太定本を入手しなくてはいけなかったのであろうか。この点は、現行本の成書について検討する際に論じる。

（三——四）小括

以上を単純にまとめると以下のように総括できるであらう。『説述』の本文は天界に存在し、儒教・仏教・道教三教のテキストが揃っている。しかし、地上においては儒仏の「三尼醫世説述」は早く亡

び、その後は呂祖が駐世の際（つまり、唐代）に注釈した道教の書のみ伝えられたという。それが唐代以来金蓋山に伝えられたというのは勿論伝説である。「三尼」は明末以降に流通し得る語であり、『説述』原本の成立が清初を遡ることはないと推測される。陶太定から左程遠くない過去、恐らく清初順治年間に『説述』の原本は成書し、間もなく金蓋山にもたらされたのであろう。「本山世有藏本」はやや誇張された表現だと思われる。金蓋山所藏本は、何者かにより持ち去られ、その後更に金蓋山麓龍嶠山房に呂祖が降壇してその内容が詳細に示された。それが、陶太定が原序を付してその内容を手録した手抄本、すなわち陶太定本となる。それが刻本ではないことにも注意しておきたい。また、この本は、陶太定の同時代人である黄隱真、すなわち黄赤陽によって「輯題」（「閔序」）もしくは「標題」（「閔疏」）されたとされる。現行本の題目である「呂祖師三尼醫世説述」は、もともと陶太定本において黄赤陽によって定められたものを継承しているのであろう。

（三―二） 簀中書本について

次に、閔一得が『説述』の本文校訂に用いたもうひとつの本である簀中書本について閔の記述を検討したい。閔序の冒頭に近い部分に次のようにある。

記憶するところでは、〔私は〕まだ若い時から、桐柏山で〔高〕

東籬老師のおそばにつかえることができた。師は奉天の人で、年齢は〔その時〕すでに百数十歳であり、姓は高氏である。浙閩総制の高公は、師と同宗である。〔師が〕辺地をめぐって〔金蓋〕山に立ち寄った際に、三尼医世の説について質問した。師は言われた。「わたしはかつて王陽明先生の簀中書の内編においてこれを見た。その門人の王龍溪が刊行し世に伝えたものである。これは伏羲や黄帝がみずから世を治めた大道なのである。」

憶自弱冠時、得侍東籬老師於桐柏山。師奉天人、年已百有十餘歲、姓高氏。浙閩總制高公、蓋師同宗也。巡邊過山、以三尼醫世說問師。師曰、吾曾見於王陽明先生簀中書之内編、其門人王龍溪刻以傳世者、是羲黃以身治世之大道也。（一葉表）

これによると、閔一得の師高清昱は「王陽明先生簀中書」（王陽明が竹籠に入れて秘藏していた書というほどの意であろう）なるもののなかに、王龍溪が世に伝えた三尼医世に関わる一本があるのを見たとされている。三尼医世の書が王守仁・王畿に伝えられていたという説は附会であろうが、ともあれ簀中書本とでもいべき本のあったことが言われている。

なお、上の引用の内容からは簀中書が『説述』であったかどうかも明確に知ることはできないが、先に見た通り、閔疏に引かれる簀中書本の文字が明らかに『説述』の本文に対応しているので、この

引用の中の簀中書も、少なくとも『説述』を含む書であるとみなすのが妥当と考えられる。

その来歴にあまりにも不明な点が多い簀中書本であるが、現行本の形成においては、簀中書本は重要な位置づけを与えられているように思われる。先述の通り、関一得がその疏の中で行っている校訂の様式を見ると、簀中書本は現行本の内容に非常に近いテキストであったことが窺われる。『説述』の関疏において、簀中書と陶本とが校訂のために参照されていることは上で見た通りであるが、関一得が簀中書を参照する際には、一箇所の例外を除いて常に「簀中書〔の文字は本文の文字と〕同じ（簀中書同）」と記しており、簀中書の文字と現行本の本文の文字が殆ど同一であることが看取されるのである。¹¹つまり、関一得は現行本の文字を定める上で、陶太定本ではなく、簀中書本に依拠する度合いが高かったものと推測される。

以上に見た簀中書に関わる想定は、陶太定本に関する想定とどのような関係にあると考えられるであろうか。まず、陶太定「原序」に載せられた陶太定本に関する情報からは、三教全てに関わる『説述』全書の本文が天書として天に蔵されており、その道家に関わる疏が唐代に呂祖によって書かれて金蓋山に伝わったという神話的な想定の存在が知られる。しかし、金蓋山に伝承されたという呂祖の原本は失われ、陶太定本は、呂祖の扶乩を介して金蓋山で復元されたテキストであった。他方の簀中書本は、王守仁・王畿弟子により伝えられたとされる。彼等は儒家であるが、儒家の『説述』は夙に

滅して伝わっておらず、また、簀中書本と陶太定本とは互いに校勘可能なテキストであることから、それは（儒家に伝承された神話を有するにも拘わらず）道家の『説述』であると理解してよいであろう。なお関一得が記す簀中書本に関わる記載には金蓋山との関係が全く触れられないが、これはこの本が元来金蓋山の外で成立した呂祖の扶乩文献である可能性をも示唆しているといえよう。

少なくともこの本は陶太定による編集を加えられる以前の段階で流布した本と見做されており、その事が王守仁・王畿に伝えられたという神話として表現されているのであろう。二王に伝えられたという神話を史実として採用することはできないので、筆者としては、簀中書本は、陶太定が編集を加える以前に流布した古い『説述』の内容を反映する可能性のあるテキストであったと、ひとまず規定したい。そして、現段階では、そのような陶太定以前の『説述』のテキストは実在した、という推測を立てておこうと思う。なお、簀中書本について、もうひとつ注意されるのは、それが王畿によって「刻以傳世」されたものと述べていることである。陶太定本が手抄本であったのに対し、簀中書本は刻本だったようである。

四、現行本について

（四―二）二つの底本

上で見て来た所により、『古書隠樓藏書』所収の『説述』現行本は、

簀中書本と陶太定本を基礎としていることが理解される。陶太定本に具わっていた陶太定の「原序」と黄赤陽によって定められた題は、そのまま現行本にも載せられている。現行本の本文については、両本ともに参照されていることは確かであるが、簀中書本への依存が比較的高いであろうことも上で見た通りである。

なお、関一得の疏には、本文に関して簀中書本及び陶本すなわち陶太定本との異同が比較的詳細に記されている。その体裁からすると、あたかもまず底本として使用した本が別に存在し、それを簀中書本と陶太定本とに比べているかのように見える。しかし、もしこの両本以外に第三の底本があるのであるとすると、その底本について関一得は何も語っていないことになり、他の諸本について比較的細かく言及する彼の態度との間で著しく一貫性を欠くことになる。しかも、その場合、もつとも重要な本について沈黙していることになり、不自然である。ここは推測するしかないが、現行本には第三の底本があるわけではなく、関一得は陶太定本と簀中書本を混合して独自の本を作り、疏を設けてその中で両本の差異を解説しているであろう。

(四―二) 呂祖の乩筆による補填

――関疏中の「呂祖曰」について

関一得が現行本を再編・刊行するに当たっては、単に陶太定本と簀中書本によって独自のテキストの内容を構成するだけでなく、さ

らに詳細な疏を加えて本文を解説している。その際、「簀中書曰」云々、「陶本」云々などとして、それぞれの本の異同を述べるが、更に「呂祖曰」云々として詳細な解説を加えている。これは呂祖による乩示で得られた言葉を注として記しているものと思われる。『説述』現行本の関疏の最後の呂祖注は長文であるが、その後に「以上は道光三年に別々に示したものである（此道光三年分所示者）」（二十一葉裏）と述べられている。おそらく、道光三（一八二三）年前後に呂祖の扶乩を行い、呂祖注として関疏に加えたであろう。

なお、呂祖による注が追加されることについては、扶乩という手段を用いて修行と著述を行う関一得の信仰活動を浮き彫りにする側面があるといえる。先に引いた関序において、関一得は洞庭東山で『説述』の陶太定手録本を入手したものの、「因乞携歸、其時未聞個中玄理、妄期道成而後行之」（四葉表）と述べ、「個中玄理」、すなわち『説述』中に説かれた「玄理」を悟ることができないまま先延ばしにしてしまったことを、後悔の念を交えつつ説明していた。しかし、その直後の文章で関一得は次のように述べるのである。

時はくだって道光五年、沈太虚翁が、昔授けた『醫世功訣』についてお問いになり、また呂祖が沙盤に降臨して、長大な萬言「もの文字」をお示しになったので、奥深い道理がとうとう明らかになった。

遅至道光五年、蒙吾太虚翁詢呈昔授醫世功訣、又沐呂祖臨沙、

洋洋萬言、玄理乃明。（四葉表裏）

この文章は、『説述』の関序の一節であるが、この引用箇所では関一得が得た『功訣』とは、『説述』とはまた別の書である。関序の他の箇所の記述によると、沈太虚は乾隆丙午、つまり乾隆五十一年（一七八六）年に仙去している⁽¹²⁾。したがって、道光五（一八二五）年における『功訣』の授与は、生前の沈太虚によるものではなく、沈太虚が仙人となって乩筆に降ることで行われた信仰的実践によるものと見なすのが妥当である。ともあれ、その際に関一得は呂祖の臨沙、すなわち降乩にも浴し、「万言」にわたる教示を得、それにより「玄理」がはじめて明らかになったと述べている。ここでいう「玄理」とは、関一得が直前の文章で『説述』に関して「玄理」を聞かなかったと後悔している、その「玄理」であろう。このように、『説述』を入手した際に聞けなかった「玄理」を、後の降乩で聞いたと、関一得は述懐しているわけである。おそらく、時間とともに修行に関する理解や境地が進展し、新たな悟りを得ることで「玄理」が追々明らかになってゆくという過程が存在するのであろう。ただし、それが単に自己の悟りとして書き記されるのではなく、呂祖による降乩という形をとって記される。あるいは、日頃から関一得と交流する乩手がいて、その乩手の修行理解・経験の展開がこのような進展をもたらす可能性も十分あるであろう。

上で見たとおり、『説述』の呂祖注で言及される年は道光三年で

あるので、「玄理」が示されたとされる呂祖の降乩よりも二年ほど早い。『説述』の呂祖注が書かれた段階では、まだ「玄理」の理解は反映されていないかもしれない。しかし、いずれにせよ、関一得はこのようにして自分たちの学びの進展に合わせて、それを呂祖の乩筆として書物に残してゆくという活動をしているのであり、その活動の一端が、『説述』関疏のなかの呂祖注に示されていると見て間違いないのである。

（四―三）現行本刊行の意義

（四―三―一）金蓋山における陶太定本の喪失への対応

現行本の編集については、ひとつのわかりにくい問題が存在する。それは、関一得が金蓋山にいた当時、『説述』のテキストはそこに存在しなかったのか、という問題である。先に見た、現行本『説述』の底本は何かという問題とも関連する点である。先に触れた通り、陶太定本は康熙三年に金蓋山麓の龍嶠山房で成書した手抄本であるので、金蓋山にその手抄本が保管されていれば、関一得は必ずやそれを底本に用いるはずである。ところが、実際には、関一得は金蓋山以外の土地で陶太定本を入手している。簞中書本の入手先は示されていないが、それが陶太定の編集を経ない本であること（少なくともそのような本として想定されていること）は、先に見た通りである。簞中書本も山外で入手されたものであろう。これらのことは何を意味するのか。推測するに、関一得在世当時、康熙年間に

編纂された陶太定本は、(またしても)金蓋山からは失われていたのではあるまいか。そのように考えないと辻褄が合わないのである。陶太定本が関一得の時には散逸したと見做されていたであろうことは、関序のなかの以下の部分にも示唆されているように思われる。(最初の部分は、既に引用した箇所と重なることを諒とされたい。)

三尼醫世の説について〔師高清昱に〕質問した。師は言われた。「わたしはかつて王陽明先生の簣中書の内編においてこれを見た。その門人の王龍溪が刊行し世に傳えたものである。これは伏羲や黃帝がみずから世を治めた大道なのである。またかつてこれ〔すなわち三尼医世の道〕について俗世に滞在している仙人である李泥丸にたずねた。私の門下の沈一炳は、以前これと三回出會っている。一炳はかつて三尼という二文字について泥丸に問うた。泥丸は、この道は伏羲・黃帝のころから傳わり、仲尼・牟尼・青尼の三大聖人が〔それぞれ〕教を立てて闡明し、三教の門徒がおのおのその入門の方法を述べて一篇〔ごと〕にまとめたものである。〔各篇の書名を〕あるものは説述といい、あるものは心傳といい、あるものは功訣といい、あるものは功用ともいうが、現在では散逸してしまった、と言った」と。私が高〔東籬〕先生から聞いたのは以上である。

以三尼醫世説問師。師曰、吾曾見於王陽明先生簣中書之内編、其門人王龍溪刻以傳世者、是羲黃以身治世之大道也。又嘗聞諸

駐世神仙李泥丸。吾門下沈一炳、曾三遇之。一炳嘗以三尼兩字、叩於泥丸。泥丸曰、此道傳自羲・黃、仲尼・牟尼・青尼三大聖人、闡以立教、三家之徒各述其入門之徑、彙成一編、或曰説述、或曰心傳、或曰功訣、或曰功用。今散軼矣。余昔聞於高師者如此。(二葉表裏)

これは、関一得が金蓋山に立ち寄った高清昱に、三尼医世の教について問うた際、高清昱が述べた言葉である。これによると、高清昱自身は簣中書本を見たと言うが、それと同時に、沈一炳が出会った仙人李泥丸は三尼医世の道に関するほかの諸書の題目とともに『説述』に言及し、それらはすでに散逸していると述べたとされている。先述の通り、沈一炳の仙去は乾隆五十一年である。乾隆年間の末頃までには、関一得の周辺には『説述』を散佚した書であると認識している人もいることが知られる。また、高清昱は簣中書を見たと述べているが、関一得が金蓋山でわざわざ師に三尼医世について尋ねているのに、それに答えるのに簣中書本の話題のみを持ち出すというこの会話の状況からは、やはり当時、金蓋山では『説述』が既に失われていることが窺われるように思われる。

このように、関一得の時代には、金蓋山においても陶石庵本は失われていたと見るのが妥当であろう。おそらく、そのような現実が、関一得を『説述』諸テキストの収集と刊行に向けて駆り立てたのであろう。その際、見過ごすことの出来ない点は、関一得は『説述』

を版本に付し、刻本として世に出したということである。確かに實中書本は刻本だったようであるが、陶太定本は手抄本であるとされる。また、朱珪蔵無名人手跋本も手抄本であつたろう。おそらく、『説述』は湖州を中心とした小さな地域で、主として手抄本として流布していたのではなからうか。『説述』は、関一得によって改めて版本に付されることで、より広汎な読者・修行者のもとへと届けられる条件を備えたと推測できる。「三尼医世の教」の発生は未詳であるが、基本的には湖州周辺の地域的な信仰にとどまっていたはずである。関一得は、それを、より広汎な影響力をもつ伝統として確立しようとしていたように思われる。

(四—三—二) 王常月との関係づけ

前項で指摘した、『説述』を刊行することで「三尼医世の教」に広汎な影響力をもたせようとする関一得の意図は、彼が奉じる「龍門正宗」の正統性の強調とも関連している。関一得は自身の著作の中で複数回にわたり、王常月が伝戒に際して『説述』を授けていたことに触れる。一九九九年の拙論で指摘した通り、関一得は、『古書隱樓藏書』所収『皇極闡關仙經』巻下に付した注の中で、清初の人王常月による伝戒の際には『三尼醫世説述』三千餘部が弟子三千餘人に授けられたことを述べている。そのことから、『三尼醫世説述』は王常月によって信奉されていると関一得が考えていることが知られるのである⁽¹³⁾。また、先に見たように、陶太定「原序」には王常月

の述べた言葉として「儒燬於秦、釋燬於晉、世不可得而見矣。世所流傳者、特道宗醫世入手之則」(七葉表) という文字が記され、王常月が『説述』を医世入門の法を説いたものであると述べたことになっている。また、『説述』関序では、黄守中が『説述』を所有していたことが次のように述べられている。

四年以上にわたり官職のために旅して、鶏足山に立ち寄り、世にとどまっている神仙である鶏足道者を、龍樹山房に訪問した。仙人の姓は黄、〔法〕名は守中、西域の月支の人であり、元朝の時に中国に至り、久しく鶏足山にとどまっているため、この号があるのである。順治十六年に京師に至り、太上三大戒を王崑陽律師から授かることを望んでいた。〔中略〕つくえの上に本は少なく、『佛説持世陀羅尼經』のほかは、ただ『三尼醫世説述』があるばかりである。

越四載宦遊過雞足山、訪住世神仙雞足道者于龍樹山房。仙姓黃名守中、西域月支人、元時進中國久休雞足、故有是號。順治十六年入京師、求授太上三大戒於崑陽王律師。〔中略〕案頭無多書、佛説持世陀羅尼經外、唯三尼醫世説述。(一葉裏—二葉表)

ここでは、黄守中が王常月からの三大戒授戒を求めていたことと、彼が『三尼醫世説述』を所有していたことが記されている。上述の『皇極闡關仙經』の記述に照らせば、黄守中が所有している『三尼

『醫世説述』は、王常月から受戒した際に授かったものとしてここに言及されているものと理解できる。

管見の限り、王常月と『三尼醫世説述』の関連については、『古書隱樓藏書』所収書のなかの閔一得と陶太定の発言以外に言及例はないようであり、閔一得が編んだ『金蓋心燈』にすら触れる所が無い。そこから判断するに、王常月による『三尼醫世説述』の伝授とは恐らく閔一得が創作して伝えた虚構の物語と言わねばなるまい。しかし、閔一得は、読者とそのような物語を共有することで、『説述』を王常月の龍門派（「龍門正宗」）の正統性に関わる書として広めようと意図しているように思われる。特に注意すべきは、王常月の傳戒行事において『説述』も伝えられたとする物語により、「龍門正宗」なる系譜的正統性と、「三尼医世の教」という扶乩の正統性とが交差させられている点である。おそらく、閔一得は「三尼医世の教」という金蓋山と深い因縁をもつ伝統を王常月の傳戒行事に直接関連づけることで、閔一得に代表される金蓋山の龍門派門徒と王常月の「龍門正宗」を濃密に関連づけて、金蓋山の龍門派が「龍門正宗」における中核的な地位にあることを示唆しようとしているかに思われる。金蓋山の地域的な仙道の伝統を、丘処機以来の偉大な伝統の中に位置づけて、自分が修行して暮らす場所を偉大な伝統の帰着点、重要な修行地として強調することを目指しているのであろう。ただし、その偉大な伝統である「龍門正宗」も、また地域の信仰である「三尼医世の道」も、共に閔一得が大胆に創作し編集すること

で成立しているという点を忘れてはならないであろう。自己が関与する修行の場を、大胆に盛り立てて世間に示すことが、彼にとっては大変な仕事だと考えられていたようである。

五、結 論

以上、本稿では閔一得の『三尼醫世説述』がどのように形成されたかを詳細に検討した。『三尼醫世説述』は、神話的な伝説としては、伏羲・黄帝以来、三尼に伝承された三教の本經を踏まえ、「道宗」つまり道教に関わる教えの伝承を、唐代に文尼である呂祖が解説して著したものとされる。呂祖がその文を地上の何処で開示したかについては明かされないものの、金蓋山ではそれが同山に伝承されたという説が信じられていた。湖州周辺で成立した同書の一本が金蓋山にも伝わったのであろう。しかし、その本はある時失われ、金蓋山での伝承は一旦途絶えてしまう。一方金蓋山の外で伝承された本のひとつに簞中書本が存在し、これは王守仁と王畿の間で伝えられ、後者がこれを刊刻したという伝説に彩られている。閔一得の手に簞中書本が刻本の形で存在したことはおそらく事実なのであろうが、二王の手を経たというその来歴は神話と断定してよいだろう。また、王常月が『説述』を戒子に授与していたこと、それにより雲南の黄守中なる人物が『説述』を所有していたという物語もまた神話に属すとみなすべきであろう。

では、神話ではない、歴史的事実に根ざした『説述』の成立と展開とはどのようなものであったと考えられるか。その起源について言えば未詳としか言いようがない。あるいは呂祖の乩書としての『説述』の原本が金蓋山で形成された可能性も完全には否定できないが、複数の本が太湖周辺地域にある程度流布していたようであり、金蓋山の外の呂祖の乩壇で成書した可能性もまた否定できない。つまり『説述』の起源とは、金蓋山をも含む湖州周辺のいずれかの場所で成書し、そこから遠くない小さな範囲で流布した、とまとめてよいであろう。尚、その成書時期は順治年間（一六四四～一六六一）頃かと推測される。

更に、関一得を信じるのであれば、康熙年間のはじめに陶太定と黄赤陽が金蓋山で『説述』を、呂祖の扶乩に頼りながら（実際には他所から入手したであろう本を参照しつつ）再構成し、それが手抄本として成書した。すなわち、陶太定本である。その後、その本は金蓋山では失われたが、金蓋山の外では、簀中書のような陶太定の手を経ない本とともに、おそらく書写されることを経て小規模に流布した。関一得は、湖州付近に存在する小さな「三尼医世の教」の伝統を、「龍門正宗」を補完する伝統として重視し、諸本を渉獵し、そのうちの陶太定本と簀中書本に基づいて、独自のテキストを構成さらに、自ら疏を加えて、その中に金蓋山で下した呂祖の乩示を注として織り込んで、新たに『説述』を刊行した。さらに、『説述』が王常月の傳戒において伝授されたという伝説を創作して、湖州周

辺の呂祖扶乩信仰の伝統が、彼の構想する「龍門正宗」と密接な補完関係にある書であることを示唆してみせた。おそらく清初、湖州地域の信仰であった呂祖扶乩信仰から生まれた『説述』について、関一得は陶太定と同書の結びつきを強調する中で、『説述』を金蓋山の書として描きなおし、さらにそれを「龍門正宗」の正統性とも関連づけ、飾り立てたかに思われる。本稿の結論は以上である。

注

- (1) 金蓋山の龍門派および扶乩信仰に関する論文としては、Goosseart 2009, 2011; Espósito: 2001, 2004, 2013; 尹志華二〇一四年等参照。
- (2) Espósito: 2001, 192-231; 2004, 621-698; 2013, "Part One: Creation of Linage," 17-88; 森・二〇二二も参照。
- (3) 「三尼」が林兆恩の用いる呼称であることについては、汪登偉・二〇一〇下冊、八一九頁参照。林兆恩の用いる三尼の觀念の実例については、門人陳衷璣訂正『林子三教正宗統論』「山人」への「附」である「三尼字義」条を参照。そこには、「或問尼字之義。林子曰、尼、山也。而尼也者、是亦鎮靜不移之義也。故孔子名丘、字仲尼。而老子曰清尼。釋迦曰牟尼。（中略）林子曰、儒之執中、道之守中、釋之空中、而其心之尼、可得而動耶」（王見川、林万傳主編『明清民間宗教經卷文獻』第三冊、四六七～四六八頁）とある。これによると、「尼」は「山」すなわち「鎮靜にして移らず」の意とされ、心を不動にすることは、三教聖人に共通のものであるという理解に基づいて、このように呼ばれることを明らかにしている。関一得自身は明確には言及していないが、「三尼」の説については林兆恩の影響を受けている可能性がある。もしそうであるとすれば、『古書隱樓藏書』のテキストで老子を「青尼」とするのは、「清尼」に訂正すべきかも知れない。
- (4) ここでは『藏外道書』第十冊所収影印本を使用。『古書隱樓藏書』第八

冊『天仙心傳』に載せる一八三四年の関一得序(三十五葉表)三十六葉表)には、関一得自身によって当時すでに刊行されていた『古書隱樓藏書』の目次が引かれている。なお、そこには『説述』と『功訣』とはともに著録されており、当初よりこの叢書に含まれていたことが知られる。また、『管窺』については記録がないが、一八二八年の『説述』関氏序に「爰附管窺七則、鈔成一冊」(序・四葉裏)とあることから、当初より『説述』の中に含まれているものと考えられる。『古書隱樓藏書』については、汪登偉・二〇一〇、陳雲・二〇一七参照。

(5) 『金蓋心燈』卷三「陶石庵先生傳」によれば、陶太定、名は思萱、字は杞瞻。石庵子はその号である。明末の帰安県(浙江省)に生まれる。生年は未詳。太定については森・二〇二一参照。

(6) この跋は版心に「三尼醫世説述功訣跋」と刻されており、『功訣』の跋であるかの如き体裁を採っている。しかしその内容を見ると、冒頭に「簣中書」という『説述』の異本について説いており、『説述』を視野にいれた跋であることがわかる。

(7) 陶太定の原序に次のようにいう。「世所流傳者、特道宗醫世入手之則、蓋呂祖駐世時、得聞是説、闡述本經之義、授之法嗣、乃本經注疏、不是經文。」(七葉表裏)

(8) 陶序では、本来金蓋山にあった『説述』が何者かに持ち去られ、後に呂祖の扶乩によって補完されたと考えられているようである。本稿後文参照。

(9) 黄赤陽と陶太定については、森・二〇二一参照。

(10) 『金蓋心燈』卷二「黄赤陽律師傳」によれば、黄赤陽は、もと茅山に居する龍門派第七代道士沈太和から、師兄の孫守一(玉陽)を介して「守圓」の法名を送られていたが、後に北京に赴いて王常月より「守元」という名を授かったとされる(卷二・二十四葉裏・二十五葉表)。また、隠真子の號も有する。黄赤陽が北京で王常月から大戒(三大戒)と「守元」という名を得たという『金蓋心燈』の記述については俄に信を置き難いが、関一得は自説に基づいて「守元」の號を用いた可能性が高いように思われる。

現行本の文字が「守中」となっているのは、単なる伝写の誤りであろうかと思う。なお、その名の複雑さを避け、本書では便宜的に黄の号である黄赤陽をもって呼称することとする。森・二〇二一参照。

(11) 例外となるのは、『説述』坤卦本文「此爲下手第三步」(十七葉表)に付された閑疏に「簣中書、此句上有呂祖曰」(十七葉表)云々とある箇所である。

(12) 『説述』関序・一葉裏参照。

(13) 森・一九九九、二五七頁参照。「律祖(王常月を指す——森注)於順治・康熙間、五開演鉢堂、付授太上三大弟子三千人餘。傳戒衣鉢有呂祖醫世説述、則得受者有三千餘部。豈非眞道之大行乎」(『尹真人東華正脈皇極闡辟証道仙經』卷下、二十七葉裏・二十八葉表、『藏外』⑩三八一頁参照)。ただし、『金蓋心燈』には王常月と『説述』の關係を示唆する語は見当たらないようである。

参考文献(アルファベット順)

陳雲「関一得研究」成都：巴蜀書社、二〇一七年。

Esposito, Monica “Longmen Taoism in Qing China: Doctorial and Local Reality.” *Journal of Chinese Religions* 29, 2001, 192-231.

——— “The Longmen School and its Controversial History during the Qing Dynasty”. In John Lagerway ed., *Religion and Chinese Society*, Hong Kong: Ecole française d'Extrême-Orient & Chinese University of Hong Kong, 2004, vol. 2, 621-698.

——— *Creative Daoism*, Paris: University Media, 2013.

Goossaert, Vincent “The Jintai Shan Net Work: A Lay Quan zhen Daoist Organization in Modern Jiangnan.” Paper for the “Popular Confucianism and Redemptive Societies.” International Conference at Fuguang University, June 2009.

——— (高萬桑)「金蓋山網路：近現代江南的全真居士組織」『全真道研究』

第1輯、濟南・齊魯書社、二〇一一年一月、三一九～三三九頁。

森由利亜「呂洞賓と全眞教——清朝湖州金蓋山の事例を中心に」砂山稔、尾崎正治、菊池章太編『講座・道教』1〈道教の神々と經典〉東京・雄山閣出版、一九九九年、二四二～二六四頁。

——「関一得『金蓋心灯』に見る「龍門正宗」の物語(narrative)作りの一側面——朱文藻・張復純『金鼓洞志』との対比から見る黄赤陽の役割」『多元文化』二〇二二年二月、一〇月、一二二～一九九頁。

汪登偉『古書隱樓藏書——道教龍門派関一得内丹修煉秘籍』上・下冊、北京・宗教文化出版社二〇一〇年。

尹志華『王常月學案』濟南・齊魯書社二〇一一年(a)。

——「清代全眞道傳戒初探」『全眞道研究』第一輯、濟南・齊魯書社、二〇一一年(b)十一月、一三七～二八三頁。

——「清代全眞道歷史新探」香港・香港中文大學出版社、二〇一四年。

——「清代全眞道傳戒若干事實再考察」趙衛東主編『全眞道研究』第五輯、濟南・齊魯書社、二〇一六年。